



Title	越中における「思ふどち」の文学の始発
Author(s)	廣川, 晶輝
Citation	国語国文研究, 105, 10-23
Issue Date	1997-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94772
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_105_10-23.pdf



越中における「思ふどち」の文学の始発

廣 川 晶 輝

一

大伴家持が越中に赴任したのは天平十八年の七月であり、月がかわつて八月に国守家持を囲んでの宴が催されたことを『万葉集』（巻十七）は告げている。その一群の宴歌は、家持によつて書きとどめられのちに『万葉集』に収載されたわけだが、この作品はどのような読解を我々に要請しているのであらうか。本論はこの点を考察することを主要な論点とするが、それに先だつて本文を掲げる。なお、本文は基本的に日本古典文学全集版『万葉集』（以下、『全集』）に拠る。

八月七日夜集「于守大伴宿祢家持館」宴歌

①秋の田の 穂向き見がてり 我が背子が ふさ手折り来るを
みなへしかも

(三九四三)

右一首守大伴宿祢家持作

②をみなへし 咲きたる野辺へ 行きめぐり 君を思ひ出たも
とほり来ぬ (三九四四)

③秋の夜は 暁寒し 白栲の 妹が衣手 着むよしもがも
あかき (三九四五)

④ほととぎす 鳴きて過ぎにし 岡びから 秋風吹きぬ よしも
あらなく (三九四六)

右三首掾大伴宿祢池主作

⑤今朝の朝明 秋風寒し 遠つ人 雁が来鳴かむ 時近みかも
あき (三九四七)

⑥天離る 鄙に月経ぬ しかれども 結ひてし紐を 解きも開け
なく (三九四八)

右二首守大伴宿祢家持作

⑦天離る 鄙にある我を うたがたも 紐解き放けて 思ほすら
めや (三九四九)

右一首豫大伴宿祢池主

⑧家にして 結ひてし紐を 解き放けず 思ふ心を 誰か知らむ
も (三九五〇)

右一首守大伴宿祢家持作

⑨ひぐらしの 鳴きぬる時は をみなへし 咲きたる野^の辺を 行
きつつ見べし (三九五二)

右一首大目秦忌寸八千嶋

古歌一首大原高安真人作年月不審 但随二聞時一記「載茲」焉
⑩妹が家に 伊久^{いく}里^りの杜^{もり}の 藤の花 今来む春も 常かくし見む
(三九五三)

右一首伝誦僧玄勝是也

⑪雁^{かり}がねは 使^こひに來^きむと 騒^{さわ}くらむ 秋風寒み その川^かの上に
(三九五三)

⑫馬並^なめて いざ打ち行^いかな 波谿^{しやた}の 清^いき磯^{いそ}廻^まに 寄^よする波見
に (三九五四)

右二首守大伴宿祢家持

⑬ぬばたまの 夜は更^ふけぬらし 玉くしげ 二上山^{ふたがみ}に 月傾^{めづ}き
ぬ (三九五五)

右一首史生土師宿祢道良

家持越中守時代の最初期の作品であるこの歌群についての貴重な
先行研究として、伊丹末雄氏「八月七日宴歌」(『万葉集を学ぶ』第八
集 一九七八年二月)・森淳司氏「万葉集宴席歌考——天平十八年八月
七日、大伴家持の館の集宴歌十三首——」(『美夫君志』二六 一九八二年三

月)・遠藤宏氏「天平十八年八月七日の家持」(『論集上代文学』第一三
冊 一九八四年三月)・大越喜文氏「天平十八年八月七日の宴——家持
と池主——」(『国学院雑誌』九三・一〇 一九九二年一〇月)・橋本達雄氏「万
葉集全注 卷第十七」(以下、『全注』。一九八五年六月)がある。とり
わけ橋本氏「全注」は示唆に富む見解を示している。しかし注釈書
という性格から、歌群全体の構成理解について詳細に論じていると
は言い切れず、私見を述べる余地はありそうである。本稿では当作
品の有機的構成を理解することに意を注ぎ、そこから、この宴席以
降展開される家持越中守時代の歌づくりの営為に対してこの作品の
もつ意味を定位したい。

二

少々迂遠ではあるが、この歌群の歌をひとつひとつ見て行くこと
から始めたい。

①はこの歌群の冒頭を飾っており、この宴の主人家持自身の歌で
ある。窪田空穂氏「万葉集評釈」(以下、『窪田評釈』。なお、引用は
窪田空穂全集に拠る)は、

「穂向き」は、穂のなびきぐあい。稔りが良ければ深くなびき、
悪ければ浅い意。(略)国司はその年の稲のできばえを檢察する
のが職責の一つとなっていたので、その意でいつているもので
ある。

と、国司としての職責に対する家持の意識をこの歌に見出している。

②については『古義』の、

歌意は、女郎花の咲たる野辺をなつかしみて、彼方此方往廻り、遊びありきしものから、なほ君と共に携りて来ざりし事を、あかず口惜き事に思ひ出して、この女郎花を折取て、野辺を廻りて、此処に持来ぬ、となり

という解釈があてはまる。そして、この①―②が恋歌仕立てになっているとも従来指摘されている。そうした要素も捉えられようが、ここで、触れておかなくてはならないのは、この①―②において「をみなへし（女郎花）」が歌われていることの意味であろう。「をみなへし」という歌材は、その用例の一部は「佐紀」の枕詞になっているとはいえ、その表記は「娘子部四」（六七五）、「姫部思」（一九〇五）、「佳人部為」（二二〇七）など、うるわしい乙女を表すものばかりである。また、その語感から、若い娘子の譬喩として用いられた用例「我が里に 今咲く花の をみなへし 堪へぬ心に なほ恋ひにけり」（二二七九）も存する。『全注』は、

その宴に興を添える目的で池主がたくさんの女郎花を折つて持つてきた

と述べ、その「興」のなかみを「をみなへし」という歌材のもつ「風流」においている。もちろん、そうした「風流」と言える側面があったことを見落とすべきではないが、その側面だけでこの歌群を見ていたのでは、見落としてしまう面があるであろう。ここでは、故郷奈良つまり妻のものとを離れている官人たちの宴という点をも斟酌するべきではなからうか。官人たちにとって「をみなへし」は、女性を想起させる語感から、宴の興をいやがうえにもかきたてる素材であったことは想像に難くない。この①―②を「風流」といった側面

を中心に捉えているだけでは、つぎの③に「妹が衣手」が読みこまれ突然に望郷と思慕の念が噴出して来る歌群の展開を明確に解くことはできまい。冒頭のこの①―②における「をみなへし」が底流し、「妹」に対する思慕の念を噴出させる契機となっていると捉えるべきではないだろうか。

三

森前掲論文は、

何人かの宴席歌で一人が何首も続けて歌うことはない。一首もしくは二首が一般的である。

とし、池主の②と③④との間には、「何程かの宴の経過が予想できる」とする。これは、それぞれの歌の詠出の機微および歌どうしの関連を考えるうえで有効な指摘であり、一連の歌群のなかで特に③④と⑤⑥が対応、関連するであろうことを教えてくれる。本稿でも③④をひとまりとして論じることにした。

③④⑥は緊密な対応をなす。③の「秋の夜は晩寒し」と⑤の「今朝の朝明秋風寒し」が対応していることについては論を俟たない。③の「晩寒し」が⑤で「秋風寒し」と寒さの理由が具体化されるのは④の「秋風吹きぬ」に拠る。③―⑤の初句・第二句どうしがこのように対応しているならば互いの第三句以降も対応させて読むことが求められる。③の「白袴の妹が衣手着むよしもがも」は、都に残して来た「妹」の衣服を身に纏うことを念じ、妹との共寝を望む男の心情を表す。一方の⑤の「遠つ人雁が来鳴かむ時近みかも」につ

いて、『童蒙抄』が、

遠つ人かりとは、雁を人に云なして蘇武の故事をふまへて詠める也

と指摘し、また、『考』が、

此次の哥もて見るに、こも都の便をまたるゝよしなり

と述べている点は重要である。都を離れ辺境の地に暮らす人間にとって待たれてしかたがないものは何であるかは⑤を読み解くうえで重要な視点であろう。

『全注』はこの歌を、

池主の二首のもつ恋愛的情緒を含む旅愁はひとまずそらし、秋の情趣だけで歌い返したのである。明け方の寒さから雁の渡来に思いをはせる風流人家持らしい歌である。池主の歌の旅愁に対しては次の歌で応じている。

と捉えている。しかし、この歌は、その「風流」や「秋の情趣だけで歌い返した」という側面でのみ把握するべきものであろうか。こは新潮日本古典集成版『万葉集』（以下、『集成』）が、

雁は遠くの人の音ずれを運ぶとされたので、都の消息をもたらす意をこめたか。

と指摘するように捉えるべきであろう。ここで考え合わせてみるべきは①である。「雁がねは使ひに来む」という文言は、いうまでもなく蘇武の雁信の故事をふまえている。この宴の出席者がこの故事に想を得た歌を理解できたことを（奈良朝に生きる官人としては至極当然のことではあるが）確認できる。

くりかえしになるが、③―⑤の対応を考慮するべきである。③に

よって都に残してきた「妹」が作品内に現われていることを勘案すれば、⑤は「雁信」の故事をふまえ「妹」からの便りを待ちわびる夫の心情を述べた歌であると捉えられよう。『全注』が③について、表面は自分のこととして歌い、家持を中心とする一座の共感を得て、宴の興を盛り上げようとしているのである。と指摘することは貴重である。③と対応するこの⑤にもあてはめるべきであろう。

つぎに④について考察する。「秋風吹きぬよしもあらなく」という歌句はこの④だけでは何の「よし」がないのか、また、何の手段方法の無さを嘆いているのか明瞭でない。この「よしもあらなく」については、『童蒙抄』が、

余之母安良奈久尔 此歌之之（ママ。余之であろう。論者注）は、上の哥の、妹の衣手きんよしもかもと云由をうけてよめる也。と、③の「よし」と関連させているのが適切である。そうなると、この歌では、「妹に逢う方法もないのに秋風が吹いてしまった」と歌われているわけだが、妹に逢う方法があったらどう対処でき、「秋風」をしのげるというのか。この点について諸注は言及しない。冷たく身にしみる秋風をしのいでくれるものは共寝による妹の暖かみであろう。家持の、

うつせみの 世は常なしと 知るものを 秋風寒み 偲ひつる
かも （四六五）

が参照される。頭のなかでは世の無常をわきまえているが、秋風の寒さによって妹との共寝の暖かみからだは思い起こしてしまふ、という歌である。当該④の「秋風吹きぬよしもあらなく」は、妹

の不在を強く印象づける効果をもつと言えよう。

この④では、「ほととぎす鳴きて過ぎにし岡びから」と「ほととぎす」が詠み込まれている。霍公鳥は言うまでもなく夏の鳥だ。仲秋八月になぜ「ほととぎす」が詠み込まれるのか、これはすこしく問題にしなければならない。『万葉集全釈』（以下、『全釈』）は、

霍公鳥が鳴いて通った岡といふのは、国守館の背後の二上山つづきの丘陵である。家持よりも早く此処に赴任して、その岡の霍公鳥を聞いた池主は、ここに霍公鳥が鳴くことを、この歌で家持に告げてゐるやうにも見える。

と述べる。しかし、はたしてそうした名所案内的内容を中心にこの歌を読んでよいのか。この問題を考えるうえで、歌末の表現が一致して④と対をなすと見られる⑥の表現を考慮したい。越中赴任の七月から月がかわりいまは八月になっている。その月日の経過に対する感慨を述べたのが「天離る鄺に月経ぬ」であるが、これは単に月日の経過のみを歌ったものではない。この⑥の「結ひてし紐を解きも開けなくに」は、妻が結ってくれた紐を解かない、つまり心移りしないという意志表示となっている。「我妹子が 結ひてし紐を 解かめやも 絶えば絶ゆとも 直に逢ふまでに」（一七八九）と同様の歌い方であると解してよい。この⑥は、初・第二句と第四・結句が、「しかれども」によって対置され結びつけられている。つまり、「天離る鄺に月経ぬ」は、妹と共寝をすることなしに月日が経ったという意味を帯びていることになり、時の経過が妻との離居を主軸にして語られていると言えよう。

ふたたび④に戻ろう。④は、夏に霍公鳥が鳴いていった岡、その

同じ岡からいま、秋風が吹いて来たことを述べている。夏から秋へと季節は移り、妻の不在のなかで時が経過していく。夏ならまだしも離居のつらさに耐えられたが、秋風が吹いたいま、身にしみる秋風の寒さから妹との離居のつらさはこらえられない、そう捉えるべき歌と言えよう。④であえて夏の「ほととぎす」が詠みこまれたのは、妻との離居の期間を提示することでその悲哀を強調せんがためであった。『童蒙抄』が、はやくに、

月日の早く立ち過たるを述べたる也と指摘していたことが当てはまる。

この④・⑥は、それぞれ池主・家持の手になるものだが、ひとり池主・家持の私的感懐だけを述べているのではないことは言うまでもない。そもそも宴というものは、出席者との共通する感懐を述べることで成り立っている。これら④・⑥の歌は、同じように越中の地で都の妻と別れて暮らさなければならぬ官人たちの気持を代弁したと捉えるべきだ。この歌に表された心情は、その座に列席する官人たちに共有される心情と言えよう。

ここまで見て、③・⑥の四首は、都から遠く離れた鄺の地越中にあつての望郷の念つまり都の妻に対する恋情と思慕の念を基底にもつということが見出される。

四

⑥の「結ひてし紐を解きも開けなくに」をうけて池主の⑦が歌われる。この歌の解釈に関しては種々の見解を生じているが、その最

たる理由は主語が明示されていない点にある。「紐解き放けて」の主語・「思ほす」の主語であり、前者・後者ともに都の妻とするのはたとえば日本古典文学大系版『万葉集』（以下、『大系』）である。

田舎にいる私を、都にいる妻は、下紐を解いて思いを寄せているだろうか。（心を寄せてなどは決していないだろう。）

もしこの歌をこう解すとしたら、都の妻と越中の夫の心は断ち切られていることになり、興醒めどころではない。この点に対する配慮から考案された解が、前者・後者ともに家持としたものである。

『私注』は、

池主が、都にある妻が自分を思ふであらうかと、疑ふ心とも取りがたいので、家持が私のことは思つて居なさらないと取るべきであらうが、ワレヲは実は池主自身のことを言ふのではなく、座に待する女性などの立場を、代つて歌つたのではないかと思ふ。つまり、家持が京の妻を思ひ紐も解かぬといふ歌を聞いて、座にある美人どもが、私のやうな田舎者では、どうせ駄目なのでせうといふ気配を見て取つて、池主が代つて歌を作つたのであらう。尤その気配は実際といふよりも、池主がさう解釈したか、或は此の歌によつてさういふ気配を作るやうにあぶり立てたとも見られようか。

と推察する。しかし、もしそうであつたらそうした事情は、たとえば「為遊行女婦「陳」思」などのように左注等に記されるのではないだろうか。すくなくともそのような記述がないのだから、作品自体は、我々にそうした読解を要請してはいないと考えておく方がよい。

『全注』も、この『私注』説を「興味深い推察」とし、『私注』同

様に前者・後者ともに家持とする。ただ、『私注』のように一首の主語を「座に待する女性」とはせず、

こは三九四と同じように恋歌の形をとつて戯れたのだと解しておく。

とし、一首の作中主体をも池主とする。これは、①―②を恋歌仕立てと解することと関連しての見解であり、その意味ではこの歌群内の構成に配慮した解釈であると言える。しかし、そう解したとして、女性ではない人物（池主）相手に、どう「紐を解いて」相手するところのか。その疑問に対する答えとして、『全注』は、

同じ「紐を解く」という言葉を用いながら、家持は妻を思つて他の女性と関係しない意に用いているのに対し、これは気を許しくつろぐ意にとりなし、やや皮肉っぽく軽く答えたところに気転が感じられる。

と説明する。しかし、同じ言葉を違つた意味に「とりなす」ことを、宴における享受者たちははたして即座に理解できたであらうか。また、作品上でも、⑥と⑧の「紐を解き開く・放く」は、女性との交渉を指している。両首の間に位置するこの⑦だけを異なる意味にあえて解釈すべきであらうか。また、その異なる意味に「とりなす」ことを「気転」と捉えてしまうところにも問題がある。『全注』は「恋歌の形をとつて戯れた」と述べるが、「恋歌」と解すると、「紐を解く」という表現はやはり男女の交情という内容を表わさざるを得ない。

さらに、「天離る鄙にある我」の把握のしかたはどうであらうか。直前⑥の「天離る鄙に月経ぬ」は、都を離れて越中国にいる官人達

の共通の感懐であつた。それを直後の⑦において、「どうせ田舎者の私なんぞに対しては、という気持ち」というように「田舎者のわたし」を主体として想定し得るのか。そうした意味の転換を宴の場の人々は即座に理解することが可能なのか。やはり問題が残ろう。これも「気転」ということがらで解いてしまふべきではないであろう。ここでは、「全集」が、「鄙にある我を」に対して、このワレは一人称複数に用いた。奈良に妻を残して来ている守家持と作者池主を中心という。

と解釈し、「紐解き放けて」に対しては、われわれが紐を解き放っているなどと、の意。引用のトを省略してある。↓三五八三（ま幸くて）。

と指摘するのに従っておき、歌の解釈は、

（天離る）鄙にいるわたしちを まさか 紐を解いていようかなど お思ひになりはしないでしょう。

のように捉えておくのがもつとも穏当であろう。

つぎの⑧の家持歌については、『大系』の現代語訳、

家で妻が結んだ下紐を解き放たずに、思ひを寄せている気持を、誰が知つていよう。誰も知つてはいない。

のように解し、そして角川文庫版『万葉集』（以下、『角川文庫』）が、「誰か知らむも」に対して、

解つてくれるのはあなたがただけの意がこもる。

と解くのがもつとも適切である。歌いぶりは個人の感懐を述べるといふ体をとっているが、この「思ふ心」の「心」もまた、官人たちが自らを同化し得る「心」であると捉えるべきであろう。家におい

て妻が紐を結つてくれたという経験は宴席に列席する官人たちの共通の経験だ。⑦の「鄙にある我を」に対しての『全集』の注、「このワレは一人称複数に用いた。」をここでも参照すべきだ。

①～⑧を考察して来た。これら八首のなかには遠く離れて都に残る妻に対する恋情と思慕の念が底流していると言え、①～⑧はこのテーマのもとに緊密に結びついていると言えよう。そしてその恋情と思慕の念は、ひとり家持あるいは池主だけの思いではなかった。同様に妻を都に残し越中にいる官人たちの思いが綴られていると言える。

五

つづけて⑨以下の五首について考察する。

⑨になぜ「ひぐらし」が詠み込まれているかについては、ただその時鳴いていたという点や「秋のあはれを感じしむる」（『全釈』など）点にその理由が求められてもいるが、一方で、なぜ「ひぐらし」と「をみなへし」がともに詠み込まれているかについて論じられて来た。『考』は、ひぐらしの鳴声によつて恋情がいっそうかきたられることを考慮し、

日晩之鳴けるにも妹こひしらのまされば、心やりになまめける女郎花の咲る野辺を見むと云なり、

と説明を加える。そして、その恋情の対象がほかならぬ奈良に残してきた妻であることについては、つとに『童蒙抄』が、

古郷の妻女を慕ふ意故、日ぐらしを詠み出て女郎花を取出たる

ならん

と述べ、また『万葉集総釈』（佐佐木信綱氏担当。以下、『総釈』）は、国守たる家持と掾たる池主との、二人の上官が都にのこしてある妻を思ひ出して、感傷的な気分になつてゐるので、その旅情をなぐさめむがために、かく詠んだのであらう。かつは、おのれの旅の鬱結を共に晴らさうとしたのであらう。

と指摘し、故郷の妻への思慕の感慨が宴の参加者に共通にあつたことを指摘する。

「ひぐらし」を詠みこむことにより恋情の切なさをきわだたせる効果をもつ歌いぶりの歌には、

黙もあらむ 時も鳴かなむ ひぐらしの 物思ふ時に 鳴きつ
つもとな (二九六四)

ひぐらしは 時と鳴けども 片恋に たわや女我れは 時わか
ず泣く (二九八二)

夕されば ひぐらし来鳴く 生駒山 越えてぞ吾が来る 妹が
目を欲り (三五八九)

恋繁み 慰めかねて ひぐらしの 鳴く島蔭に 慮するかも
(三六二〇)

があり、これらの歌の存在は、天平の貴族官人たちにとつてそうした表現のかたちが一般的であつたことを示唆する。当該⑨は、そうした歌いぶりを用いた歌であると言えよう。また、この⑨の「をみなへし」が①―②の「をみなへし」に対応することは諸注の指摘するところである。①―②の「をみなへし」に以下の歌群において展開される妹思慕の念を導き出す契機があつたことを勘案すれば、

この⑨にも故郷の妹思慕の感慨があるとみなしてよい。そして、⑨がこの作品内に位置づけられることにより、作品内において、妻と逢ふことかなわぬ越中国府の貴族官人たちの心情が強調され、その悲哀が起ち現われてくることになる。

ところで、この「をみなへし」が都の妹を想起させるはもちろんだが、逍遙するべき「野辺」は越中の「野辺」である。その意味でこの「をみなへし」は現地越中の花でもある。ここは、『集成』がこの⑨に対して、

望郷の気持の深まりを、現地への関心に引き戻す歌。

と述べるように、この歌を読むことによつて目が現地向けられてくることも捉えておきたい。⑨の現地性については次節で再述する。

つきに⑩について考察する。この歌は題詞・左注から、僧玄勝が大原真人高安作の古歌をこの宴において伝誦したことがわかるが、越中の地の宴で大原真人高安の古歌が詠まれ、この作品内に位置づけられていることの意味が問われなくてはならないだろう。⑩がこの宴で詠まれた理由を考えれば、理由の一つはこの歌群の一連の妹思慕の歌々と呼応させるためであつたということがまず考えられる。「妹が家に伊久里の社の」には「妹の家に行く」意が掛けてあり、⑨までの歌が等しく持つていた妹思慕の念と通ずる。しかしそれだけの理由であるならばもつと他の古歌も考えられたはずだ。

ここで、⑩の第四・結句「今来む春も常かくし見む」に注目しなくてはならない。この歌句を考えるうえで、参考として、

年のはに かくも見てしか み吉野の 清き河内に たぎつ白
波 (九〇八)

を見てみたい。いわゆる「養老の吉野讃歌」のこの用例では、「年のはにかくも見てしか」と歌われ、美称のついた吉野の現地の景観を毎年毎年常に見ることが望まれる。また、「かく」は現地吉野の現状を指し示すはたらきをなしている。これらによりこの九〇八は吉野離宮讃美の歌たり得ている。

当該⑩の「今来む春も常かくし見む」の方はどうであろうか。こちらも同様と考えてよい。めぐり来る春に永久に見続けようと歌うことで、「伊久里の社」に対する讃美となつてゐる。また、「かく」も「養老の吉野讃歌」と同様に、現地の現状指示の語として讃美表現の一翼を担つてゐると見てよい。

この⑩はこうした現地讃美の表現を備えているわけであり、こうした歌があえてこの作品内に位置づけられているのは、そうした現地讃美性をこの作品に付与するためであつたことを確認できよう。

ところで、従来「伊久里」が何処の地であるかが議論されて来た。

『代匠記』（精撰本）は或者の語つたこととして大和説を提示し、『考』は『延喜式』に越後国蒲原郡伊久礼神社の名が見えることから越後説を示し、また、富田景周「植葉越枝折」（石川県図書館協会復刻）は、愚按には、礪波郡般若郷に井栗谷村あれば、このほとりの林なるべし。

と、越中国説を提出した。この越中説を補強する形で、森田平次氏『万葉事実余情』（一九三〇年六月石川県図書館協会発行）は、

東大寺の所蔵天平神護三年五月七日越中国解に東大寺墾田礪波郡石栗庄地壹佰壹拾貳町と見え東大寺要録卷六に載たる長徳四年の注文定にも越中国礪波郡石栗庄田百廿町とあり其地は今同

郡に石栗谷村と称する村落ありて此地辺を般若郷とす

と記している。つまり、大和・越後・越中国三説鼎立の体をなしている。鴻巣盛廣氏『北陸万葉集古蹟研究』（一九三四年二月）は、大和説に対し、

奈良の南方にあるとする或人説も、根拠のないもので信じ難い。とする。また、越後説に対しては、

越後の伊久礼とするのは、神名帳や和名抄に載つてゐる地名だから、強ちに拒け難いけれども、理と礼と音も異なつて居り、又越後は隣国ながら、遙かに遠く隔つた地名であるから賛成し難い。

とする。妥当な処置と言える。

一方の越中説であるが、森田氏が挙げる東大寺所蔵天平神護三年五月七日付「越中国司解」には、「石栗庄」ではなく「石栗村」とあり（『大日本古文書 家わけ十八ノ二』一九五二年三月）、森田氏の誤読とおぼしい。さらに、奈良国立博物館所蔵天平宝字三年十一月十四日付「越中国礪波郡石栗村官施入田地図」（『大日本古文書 家わけ十八ノ四』一九六六年三月）に「石栗村」・「石栗庄」とあり、東大寺所蔵神護景雲元年十一月十六日付「越中国礪波郡伊加留岐村墾田地図」（同）にも「石栗村」とある。この点のみから言えば、越中説の根拠も薄弱と言わざるを得ない。しかし、『万葉事実余情』には、

大原氏は姓氏録に敏達天皇孫百濟王之後也と見え統紀に天平十一年夏四月詔曰省「從四位上高安王等去年十二月二十五日表」具知「意趣」云々今依「所」請賜「大原真人之姓」とありて同十四年十二月正四位下大原真人高安卒とあり按に東大寺の所蔵天平

宝字三年十一月十四日の文書に越中国礪波郡伊加留岐野地壹佰町東山南利波臣志留志地西故大原真人磨地とある磨は統紀に天平十五年五月從六位上大原真人磨に授二從五位下一とあれば高安真人の子なるへしされは父高安このかた礪波郡伊久里の地は所領なりし故に此領地にてよまれたる歌なるへし

という言及もある。もとより大原真人高安・麻呂両者を親子と認定できる確証はなく、その点憶測の域を出るものでないことは言うまでもないが、「大原真人」と越中礪波郡の関連を辿ることができ、越中説の有力な傍証となっている。

さらに、「大原真人」の氏姓をもつ高安歌^⑩に、「伊久里の社」というように「社」が歌われているのはなぜか。藤井二氏『越中国礪波郡石粟村官施入田地図』の歴史的性情^⑪（『続日本紀の時代』所収。一九九四年二月）は、同地図内の神田、櫛田神田・荊波神田・男神（雄神）田などに注目し、それぞれの神田を所有する櫛田神社・荊波神社などの背景に、櫛田郷・荊波村などのような共同体的組織の存在を想定する。壱田経営にあずかるそうした地域共同体組織の労働力は郡域を越えて移動するとも指摘する。大原真人の壱田経営に「伊久里」神社の村落共同体が背景にあったと推察することもあながち無意味とは言えない。「社」が詠みこまれる必然性はここにあると言えよう。なお、各神社および壱田・神田の位置関係については、『日本古代荘園図』（一九九六年二月）『IV古代荘園図 各論 6 越中a』（金田章裕氏・田島公氏担当）も参考にした。

また、そもそも「伊久里の社」が越中の地でないとするならば、越中国守館で開かれているこの宴で「常かくし見む」と歌うことは

はなはだそぐわないものになってしまおう。この表現のもつ現地讚美性の制約は存する。すくなくともこの^⑩が宴席において披露された時、この^⑩は宴の参加者に無理なく理解されたことを考慮すべきであろう。

以上の点から、「伊久里の社」を越中の地としておくのが最も妥当と判断される。この^⑩についても次節で再述する。

つぎに^⑪・^⑫について見てみたい。^⑪・^⑫はあとで触れるように一組になっており、この宴席歌群のまとめた存在をつとめている。

^⑪は^③・^⑧の妹思慕のモチーフによって貫かれた部分に対するまとめとして歌われている。^⑪を雁信の故事に則した歌と捉えることは論を俟たず、『口訳万葉集』がこの歌の解釈を、

いとしい人の住んで居る家の辺の川、即佐保川の辺では、已に雁が此方へ使ひに来よう、と騒がしく鳴いて居ることであらう。

と、都で待つ妻という点を捉えて解釈していることはその意味で適切であると言えよう。中西進氏『大伴家持3越中国守』（一九九四年二月）は、

シベリアはほかには家持が歌うだけで（巻十九 四一四四）、いま一所懸命ツンドラ地帯の川のほとりでカリが騒いでいるだろうというのは、いかにも家持らしい国際性豊かな想像ではないか。

と述べ、「大陸」から越中に飛来した雁が家持の使いとして都へと飛んで行くことを想定している。雁の飛来の方角を厳密に捉えての見解だが、同様に雁信の故事をふまえた、

天飛ぶや 雁を使ひに 得てしかも 奈良の都に 言告げ遣ら

む

(三六七六)

などでは厳密な方向性が捨象されていることがわかる。ただ、「辺境の地→都」という方向性は保たれているわけだが、その点に関しては次の歌を見てみたい。

九月の その初雁の 使ひにも 念ふ心は 聞こえ来ぬかも

(二六一四)

この歌の題詞には「遠江守桜井王奉^二天皇^一歌」とある。つまりこの歌のなかで「初雁の使ひ」は、聖武天皇の「思ふ心」を伝えるために都から遠江国まで飛来することを希求される存在として歌われている。この希求はつぎの一六一五、

天皇賜報和御歌一首

大の浦の その長浜に 寄する波 めたけく君を 思ふこのころ

といった「雁信」を得ることによって満たされる。一六一四の作者桜井王は、奈良朝風流侍従のひとりであり、時代の文芸を代表する風流侍従にこうした歌があるということは示唆に富む。やはり雁信の故事は、こまかい方向性の部分は捨象され、離居する大切な人とのあいだを取り持つてくれる使いという面で万葉歌人たちに享受されていたと見てよい。

この⑪は、越中の我れに都の妹からの便りを運んでくれようとしている雁の使いの姿を推量する歌い方になっている。この⑪の作者は家持であるが、これもやはり、ひとり家持の感慨を述べた歌ではなく、この宴に集う官人たちの望郷の念を代弁する形で歌われたと言える。この⑪に対して、『集成』が、

ここで再び望郷の歌となる。

と歌群的理解を提示し、『角川文庫』はさらに進めて、

宴の望郷歌のまとめ。

という位置を与えている。右に見たように⑪では都の妹とのつながりが求められている。その意味でこれらは、認め得る歌群理解と言える。

つぎの⑫には類歌、「秋風は 涼しくなりぬ 馬並めて いざ野に行かな 萩の花見に」(二二〇三)が指摘されている(『総釈』等)。たしかに二首は同様の形をもっており類歌と認定できようが、この二首は核心において位相を異にすると言えるのではないか。つまり、二二〇三が、秋雑歌に属し、秋風によって萩が見頃になったことを詠むように基本的に季節歌であるに対し、⑫は、渋谿の磯廻に「清き」の語が付けられており現地讚美の性格を色濃くうち出した歌となっている。『角川文庫』はこの⑫に対して、

宴の現地讚美をまとめる歌。

との位置を与える。適切な歌群把握と言えよう(なお、この⑫についても時節で再述する)。

さて、そうなると、⑪はこの宴席歌群全体の望郷的性格つまり妹思慕をまとめた歌であり、⑫は⑨・⑩に見られた現地性を引き継いでまとめた歌ということになる。また、①が現地越中管内の檢察という要素をもっていたことを考え合わせれば、⑫は、当歌群の冒頭部をもその射程におさめた歌ということになる。伊藤博氏は、旅において土地の物をほめる歌と望郷の念を述べる歌とが歌われる習慣がありその双方が揃うことでまったき形が整うという考えが上代

にあつたことを指摘する（『万葉集の表現と方法 下』など）。あたかも旅の歌のように⑪・⑫で望郷の念・現地讃美の双方がまとめの歌として歌われたわけである。中西前掲書では、この⑪・⑫二首をこれは追和や員外と同じようなもので、ちよつと付け加えたといふかたちである。

と位置づけるが、そのような「ちよつと付け加えた」ものなどでは決してなく、歌われるべくして歌われた、歌われずは画竜点睛を欠く歌であると言えよう。

この宴での重要なモチーフ（妻思慕・現地越中讃美）が歌いおこせられ当然宴も閉じられる方向に向かう（⑬）。

この宴席歌群全体をひと通り見て来た。二つの中心モチーフを軸に歌群全体が緊密に結びついている様相が見て取れた。また、その構成のなかで一座の官人たちの共通感情が綴られていた。この作品は、その共通感情による越中国府の官人たちの結束を我々に告げていると言えよう。

六

最後に、一座の視線が現地越中に向けられている歌⑨・⑩・⑫を考察することから、この宴席歌群のもつ意味を定位したい。⑨・⑩ではそれぞれ「をみなへし咲きたる野辺」・「伊久里の社」と現地越中の地が言挙げされている。そしてその⑨・⑩をふまえた⑫において越中の景勝の地「洪谿の清き磯廻」が歌われる。この三首には共通して「見る」があるが、これは偶然とは言えない。

まず⑨では、野辺に咲く「をみなへし」を「見る」ことが歌われる。遠藤前掲論文が指摘するように、「をみなへし」は万葉第三期以後に賞美の対象となつた花である。その美しさを賞美しようと歌うこの⑨は、万葉も第四期のこの宴に集う官人たちにとって、共通に理解することができたであろう。すでに述べたように、妻と逢えずに苦しむ心情がこの⑨には語られている。また、「をみなへし」は女性を想起させる素材であつた。それを「見る」ということは、妻と逢ふこと叶わず妻思慕の感慨に満ちている人間にとって心遣りの術となる。そしてここでは、宴の参加者に故郷の妻思慕の感慨が共通にあつたことを想定した前掲『総釈』の指摘を忘れてはならないであろう。つまり、この⑨でその共通感情は、野の「をみなへし」を「見る」（＝賞美する）行為によって体现されていると言える。

⑩では具体的な地名「伊久里の社」が登場し現地性がより濃厚になる。この⑩が歌群内に布置されたのは現地讃美のためであつたことはすでに述べた。この⑩で「伊久里の社」の讃美に寄与しているのは、幾春も藤の花を「見る」・「賞美する」表現である。また、この古歌が選ばれた理由には、この歌群のもつ妹思慕の共通感情に合致させるためということもあつた。「妹の家に行く」意を掛けられた「妹が家に伊久里の社」がそのはたらきをなしていた。故郷の妹の家に行くこと叶わず妹思慕の感懐を共通にもっている国府の官人たちにとつて、「妹の家に行く」という意を含みもつ「伊久里の社の藤の花」を「見る」と歌うことは、妹に逢えずにいる感懐を慰撫してくれるものである。この⑩でも、国府の官人たちの共通感情は、「見る」行為によって体现されていると言える。

この宴において転用・披露された大原真人高安の古歌は、一座の官人たちの共通感情を「藤の花」を「見る」ことによつて体現し、一座の視線を現地越中に向けてゆくことで、新たな歌として機能していると言える。

当宴席歌群には、ひとり家持あるいは池主の感懐だけではなく、同様に妻を都に残して来た官人たちの妻思慕の思いが綴られていた。そして、越中国府の官人たちがこの共通感情によつて結束している様相が起ち現われている。⑨・⑩はこの共通感情による結束を背景として歌群内に登場して来るわけだが、そこでは、共通感情を媒介とした一座の官人たちの結束が、賞美する視線を共有することで体現されていると定位できよう。⑫は、⑨・⑩のこうしたありようをふまえて誦詠されている。⑫では、共通感情によつて結束した官人たちと清らかな渋谿の磯にでかけ、そこに寄り来る波をとみに見ようと歌われる。これまでの歌群の共通感情による結束が、⑫において、ともに見る、視線を共有することによりさらに確認・強化されている。しかもこの⑫が宴の主催者国守大伴家持によつて詠出されたことは象徴的だ。

ここで⑫の「馬並めていざ打ち行かな」を問題としたい。「馬並めて」は、しばしば、天皇遊獵に際し天皇と臣下が馬を並べて獵に立たんとする景を描写するのに用いられる(四、四九、二三九、九二六)。天皇と臣下という図式を越中国府の国守と国司たちにあてはめるならば、当該⑫で「馬並めていざ打ち行かな」と一同をいざなうこの歌にもそうした君臣連れ立つて馬を並べる姿が揺曳しているとれなくもない。しかし、一方で「馬並めて」の例には、

ま葛延ふ 春日の山は うち靡く 春さりゆくと 山峽に 霞
たなびく 高円に うぐひす鳴きぬ もののふの 八十伴の男
は 雁がねの 来継ぐこのころ かく継ぎて 常にありせば
友並めて 遊ばむものを 馬並めて 行かまし里を…(九四八)
もののふの 八十伴の男の 思ふどち 心遣らむと 馬並めて
うちくちぶりの 白波の 荒磯に寄する 渋谿の 崎た廻り…
(三九九一)

がある。九四八では、「もののふの八十伴の男」が「友」人同士で連れ立つて出かける様が描かれ、また、三九九一では、「もののふの八十伴の男」が「思ふどち」、つまり心情を共有できる親しい仲間同士で駒を並べて行く様が描かれている。これらの「馬並めて」の用例は、同じく天皇に仕える「八十伴の男」同士のつながりを志向するものである。

殊に、三九九一は家持の作であり場所も当該歌と同じ渋谿である。これを勘案すれば、当該歌で「馬並めていざ打ち行かな」と歌うことには、同じく天皇に仕える八十伴の男として自らと思いをともにできる気のおけない仲間たちという意識が盛り込まれているとみなしてよいのではないか。

この宴は家持主催の宴である。家持は在京時さまざまな宴席に出席しているが、それは、青年貴族官人たちとの宴席であつたり、行幸時の天皇を中心とした宴席であつた。従来宴席の主催者となる機会がなかった家持が、いまは国守として配下の官人たちとの宴席を主催している。国府という「遠の朝廷」では、国守とその配下といういわば縦関係が存在する。一方、天皇を中心とした王権の構造が

ら考えれば、天皇のいる都（中心）から離れた「天離る鄙」（周縁）の越中国では、国守もその配下も天皇の臣下同士であり、八十伴の男同士といういわば横関係が存在する。家持は越中においてどちらの立場を取り入れていったのか、これは越中期の作品を考察する上で重要な視点である。この歌群などでは後者の立場が採られているわけであるが、そこで看過し得ないのは、父旅人が中心となり「思ふどち」が集うて文芸の花を咲かせた筑紫歌壇の存在である。いわゆる「梅花宴」の歌のなかには、

梅の花 今盛りなり 思ふどち かざしにしてな 今盛りなり

（八二〇）

のような歌があり、都を離れた筑紫の地で、官人たちがお互いの心を理解し合える「思ふどち」の間柄で結ばれていたことを告げている。当該作品に現われた如上の官人同士の意識は、筑紫歌壇への憧憬の念と無関係ではないことを確認しておかねばなるまい。

この宴は、家持が越中に赴任してから最初の宴として『万葉集』に載せられている。巻十七・十八・十九と展開される越中の文化圏における文学的営為の嚆矢として位置づけられていると言える。『万葉集』に収載されたこの宴席歌群は、同じく天皇の臣下として越中国にある官僚同士、八十伴の男たちの和楽の文学の始発、「思ふどち」の文学の始発を我々に告げているようだ。そしてまた、越中期の家持の諸作品を考える上で、重要な視点を我々に提示してくれていると言えそうである。

付記

近時、丸山隆司氏「もうひとりの〈家持〉たち——『万葉集』の生成①——」

（国文学雑誌五六 一九九六年三月）が上梓された。丸山論は①～⑨までを対象として、官人たちの交流を「ホモソーシャル」な関係」と捉える。しかし、⑩以降にふれていないことにより見落とされている点もあるのではないか。本稿は我々にこの作品全体が何を我々に語りかけてくれるかを考察した次第である。また、本稿で考究した共通感情に基づく一座の官人たちの交流のありようと丸山論の指すところがどのようにに関わるかについては今後の課題としたい。

（一九九六年八月一六日稿。十一月三〇日補訂）

（ひろかわ あきてる・北大大学院博士課程）